土木広報への向き合い方

私もその一人であるが、施設管理者をはじめ、インフラに携わるエンジニアの多くは、大学や高専などの専門教育課程において、“広報”について学んだ経験はないのではないだろうか。そうしたエンジニアは、専門知識のないまま、試行錯誤を繰り返しながら、見様見真似で広報に取り組まなければならない。とりわけ異動の多い職場では、いきなり広報の担当に任命されたかと思えば、ようやく慣れてきた頃に次の部署へと異動になる。研修などを通してリスキリングの機会はあろうかと思うが、日々の業務をこなしながら、広報という新たな技術を習得するのは容易なことではない。つまり、インフラに携わるエンジニアにとって、広報はなかなか大変な仕事なのである。

話は変わるが、先日、国土交通省総合政策局が主催する「インフラツーリズムモデル地区成果発表会」に出席した。インフラツーリズムとは、平たく言えば、インフラの魅力をコンテンツとするツアーを商品化し、その催行を通して周辺地域を活性化しようとする取組であり、いわば土木広報の進化系といえよう。その先進事例発表会に参加したのである。発表者は、地方整備局の担当者や施設管理者、地元の自治体職員などさまざまであったが、特に印象的であったのは、いずれの発表者も実に楽しそうに、自分が関わる事例を紹介していたことであった。もちろん、内容が伴ってこそではあるけれども、楽しそうに魅力を語る人の話はとても興味深く、いずれのツアーにも参加してみたいという気持ちになった。土木広報においても同様に、担当者が肩肘張らずに楽しんで取り組めば、伝えたいことがより伝わりやすくなるのではないだろうか。

話を戻そう。決してアカデミックな整理ではないが、土木広報には、大まかに以下の３つの目的があるように思う。

一つ目は、インフラの機能や役割、あるいは予算（税金）の使い道などに対する理解を促進するための広報である。いわば、外向けの広報といえよう。これには、ドライな情報の提供にとどまらず、納税者でありエンドユーザーでもある一般市民はもとより、社会科見学に来た子供たちなどにもしっかりと伝わるよう、努力や工夫を重ねる必要がある。しかし、たいていのエンジニアは、卒業論文や研究発表、技術報告等を通して、すでにそのためのトレーニングを積んでいるはずである。奇をてらう必要はない。データを見やすくグラフ化したり、インフラの役割や機能をできるだけわかりやすく解説したり、いかにすれば伝えたいことが伝わるか、学生時代等の経験を踏まえて知恵を絞ればよい。

二つ目は、インフラに携わる人材を育成もしくは確保するための広報である。内向けの広報とでもいえようか。かつて３Ｋなどと言われた建設業であるが、実感として、近年そのイメージは大幅に改善されてきた。しかし、いまだにかつての負のイメージに引きずられている感がある。それだけが原因ではなかろうが、全産業就業者数に対する建設業就業者数の割合は年々減少傾向にあり、また他産業に比べ建設業は、就業者の高齢化が進み、さらに若手の離職率も高く、次世代への技術継承が大きな課題となっているという報告もある。たしかに建設業は、現場で土まみれになるような泥臭い側面もあるが、どんな産業にも負の側面はあるわけだから、それを上回る魅力ややりがいが

日本大学 理工学部 まちづくり工学科 教授　阿部（あべ） 貴弘（たかひろ）

見出せるかどうかが大事なのである。そのためには、現役のエンジニアやOBが、機会をとらえて、次世代を担う学生や子供たち、あるいはその保護者等に、自分の仕事の魅力ややりがいを率直に語るのが効果的であろう。生活の基盤を支える建設業の社会的意義は大きい。そこにやりがい見出す感性を持った若者も少なくないはずである。自己紹介にも似て、自分の仕事の魅力を語るのは少々照れ臭くもあるが、それができれば、人材確保はもとより、自分の仕事に対する肯定感や誇りを高めることにもつながるであろう。

三つ目は、前述のインフラツーリズムに通ずる、観光振興や地域活性化のための広報である。インフラのスケール感や、普段入ることのできない施設の内部見学といった非日常感は、施設管理者をはじめとするインフラ関係者が思う以上に、一般市民の興味関心を引くコンテンツであることは自覚しておいたほうがよい。しかし、インフラツーリズムに至る道のりは決して平坦ではないので、伴走してくれるその道の専門家の協力を仰ぐ必要があるかもしれない。また、同僚から、「どうしてインフラ施設を観光に使わなければいけないのか？」、「観光客を入れて何かあったらどうするのだ？」といったネガティブな声も聞こえてくるかもしれない。できない理由を考える時間があったら、どうすればできるかを考えるほうがよほど“建設的”であると思うが、そうした場面に出くわした際には、道のりが険しいほどそれを乗り越えた時の達成感は大きいと自分に言い聞かせて、困難も含めて楽しんで取り組むしかない。楽しそうに仕事をしていれば、ネガティブな声は徐々に聞こえてこなくなるであろうから。先の「インフラツーリズムモデル地区成果発表会」（とその後の懇親会）では、取組のノウハウや苦労談等が関係者間で共有されていた。今後、それらが形式知として広く共有されるであろうし、本号の特集もその一つといえよう。

さて、ここまで述べてきたように、広報は“手段”であって“目的”ではない。つまり、広報に取り組む際には過度に構える必要はなく、手段の一つとして使いこなすつもりで向き合えばよいのである。さらに、エンドユーザーが具体的に見えにくいこの業界において、広報にはその生の声を直接聞くチャンスがある。子供たちの好奇心にあふれた輝く目を想像しながら、ぜひ前向きに、攻めの姿勢で、楽しみながら広報に取り組んでいただきたい。

＜参考文献＞

1）野中美貴子・阿部貴弘：インフラツーリズムの効果に関する研究、土木学会論文集、Vol.79、No.2、22-00016、2023.
2）阿部貴弘：地域のインフラを活用した観光の可能性、都市自治体におけるツーリズム行政－持続可能な地域に向けて－、pp.61-89、公益財団法人日本都市センター、2021.
3）阿部貴弘：土木人のための土木観光論－実践、土木遺産ツアーの舞台裏－、土木学会誌、Vol.99、No.6、pp.16-19、2014.

【著者紹介】阿部　貴弘（あべ　たかひろ）
1973年東京都生まれ。1996年東京大学工学部土木工学科卒、1999年同大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修士課程修了。博士（工学）。技術士（建設部門　都市及び地方計画）。パシフィックコンサルタンツ株式会社、国土交通省国土技術政策総合研究所、日本大学理工学部准教授を経て、2018年４月より現職。専門は、都市史、土木史、景観。